

チョネ・タクパシェードゥプ著『極楽国土の莊嚴の話 —その国土に往く階梯—』の和訳研究

—浄土教の成立興起への問題提起—

中御門 敬 教

はじめに

本稿は、チベット人僧侶チョネ・タクパシェードゥプ (Co ne Grags pa bshad sgrub. 1675-1748) による、『極楽国土の莊嚴の話 —その国土に往く階梯—』 (*bDe ba can gyi zhing bkod brjod pa —Zhing der bgrod pa'i them skas—*)¹⁾ の和訳研究である。そして、その典籍に出る阿弥陀仏と阿閼仏や、極楽世界と妙喜世界を一組に扱う記述を手がかりにして、遡ってインド浄土教の成立興起の問題について提言を行うものである。なお本稿は、以前に公表した同著者の『勝者阿閼の国土の莊嚴』 (*rGyal ba Mi 'khrugs pa'i zhing bkod*) を扱った、藤仲、中御門〔2007〕の後続研究でもある。

著者チョネ・タクパシェードゥプは、チベット仏教最大宗派であるゲルク派の学僧である²⁾。セラ寺の教科書の著者としても有名であり、チョネ版大蔵経の開版にも関わった人物である。チョネは、チョネゾン (Co ne rdzong)³⁾ にある古刹であるが、1459年にゲルク派の寺院となった。彼はそこの管長や教学指導者として、大いに活躍した。

今回扱う『極楽国土の莊嚴の話』と、すでに研究した『勝者阿閼の国土の莊嚴』は純粋な顕教方面の著作である。この二作は内容の説示に徹した「經典要約」⁴⁾であり、東西の代表的な両浄土の成り立ち方と、信仰が計らずも対照されていて、浄土教一般についても理解を深めるには格好の著作である。

このうちの『極楽国土の莊嚴の話』は〈無量寿経〉に依るものであるが、そ

の直接の原拠はチベットの二大極楽願文の一つであるツォンカパ (Tsong kha pa.1357-1419) 著『極楽願文—最上国開門—』(bDe ba can gyi zhing du skye ba 'dzin pa'i smon lam —Zhing mchog sgo byed—、以下『最上国開門』)⁵⁾である。ツォンカパ自身も冒頭・後半を除いた常用読誦版⁶⁾を作っているが、本作も同様に『最上国開門』の冒頭・後半部分を扱わず、極楽莊嚴を出す中核のみを参照したダイジェスト本である。『最上国開門』の簡略版がゲルク派寺院の常用経典ともなっているから、宗祖の著作に対する講讃の一環とも考えられる。宗祖ツォンカパと同様に、〈無量寿経〉に基づく四因による往生行、すなわち①如来を形相から作意すること、②大善根を生じさせること、③菩提に発心して廻向すること、④往生するよう誓願を立てること⁷⁾を説く文献類⁸⁾の一つとも言えるが、同じ典拠に基づきながら往生因をさらに開いて六項目にし、極楽莊嚴への観想行によって憧憬を深める箇所に著述分量の多くが費やされている。

『最上国開門』と本作の対応表⁹⁾

ここでは本作の構成と内容を確認するために、

- (1) 直接の原拠となる『最上国開門』自体の構成
- (2) 『極楽国土の莊嚴の話』と『最上国開門』との対応状況 (四段階評価)
- (3) 『最上国開門』からの引用状況等

という三項目について表にまとめた。本作の著述の順序自体は『最上国開門』と大きく変わらないが、「往生の因」が二箇所に分かれる。また『最上国開門』は各章末に内容を要約した数偈頌を配置するが、本作では、その偈頌をいわゆる「本歌取り」した偈頌が配置されている。両者の内容は異ならない。本作の解題詳細については、佛教大学総合研究所編〔2011〕pp. 88b-89a を参照のこと。

| 『最上国開門』構成 | 本作対応状況 | 引用状況等 |
|----------------------------------|--------|-------------|
| 1. 序文 (P. Ga. 87b6ff.) | × | |
| 2. 著述の動機 (P. Ga. 87b8ff.) | × | |
| 3. 往生の因 (P. Ga. 88b1ff.) | ○ | 部分引用、取意 |
| 4. 仏国土の功德 (P. Ga. 89b3ff.) | × | (見出し語のため無し) |
| 4.1. 器世間としての功德 (P. Ga. 89b4ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.1.1. 宝樹の功德 (P. Ga. 89b7ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.1.2. 宝水の功德 (P. Ga. 90b4ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.1.3. 宝蓮華の功德 (P. Ga. 91a1ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.1.4. 宝楼・資財の功德 (P. Ga. 91a6ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.2. そこに住む者の功德 (P. Ga. 91b5ff.) | × | (見出し語のため無し) |
| 4.2.1. 一般的な功德 (P. Ga. 91b5ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.2.2. 眷属の功德 (P. Ga. 92b7ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.2.2.1. 声聞の功德 (P. Ga. 92b7ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.2.2.2. 菩薩の功德 (P. Ga. 93a2ff.) | ◎ | ほぼ全引用 |
| 4.2.3. 無量光仏 (P. Ga. 94a3ff.) | ◎ | 全ほぼ引用 |
| 5. 強い欣求の重要性 (P. Ga. 95b8ff.) | ○ | 部分引用、取意 |
| 6. 請問 (P. Ga. 96b2ff.) | △ | 二偈頌のみ利用 |
| 7. ツォンカパの別願 (P. Ga. 99b2ff.) | × | |
| コロフォン (P. Ga. 101b8ff.) | × | |

浄土教の成立興起への問題提起 —阿弥陀仏と阿閼仏と、その仏国土—

チヨネ・タクパシエードゥップによる『極楽国土の莊嚴の話』と『勝者阿閼の国土の莊嚴』は、〈無量寿経〉と〈阿閼仏国経〉の往生説を「易行往生」と評価し、他の諸経と区別して特に賞讃している。その点について『極楽国土の莊嚴の話』「序文」には、「極楽と不動〔如来と〕の国土に生まれる因は成就しやすいので、この〔娑婆世界の〕国土の教化対象者が成就したなら、そこに生ま

れることを意趣なさせて、教主〔釈迦牟尼〕はこの二つの『国土の莊嚴の經（*Zhing bkod gyi mdo*）』を別に広説なさせた」とある（詳細は後続の翻訳箇所を参照のこと）。

『勝者阿閼の国土の莊嚴』には以下のようにある（Cf. 藤仲、中御門〔2007〕 p. 36）。

「（東西の浄土への積尊の称讃）（6b1. ff.、『莊嚴』10b2. ff.）

また、私たちのかの教主〔釈迦牟尼〕自身は、他の仏国土の称讃を数回お説きになったが、特に極楽と阿閼の国土の二つについて、広大に賞讃をなさせたのは、この〔娑婆〕国土の人々の殆どがそこに生まれることができるなど勝れた目的（必要性）をご覧になってからであるし、他の仏国土の或るものには生まれても、再び悪趣に戻りうることに、或るものには生まれることはきわめて難しいのである。

この二つの国土に対する称讃の仕方は、〈大解脱經〉に、

「私が阿閼世界と、極楽世界がきわめて清浄なのを見るなら、「苦」という名もない。」

などと多くの経部にも称讃されており、特に『宝積〔部第六会の阿閼国土莊嚴〕』に詳細にお説きになったのは上に述べ終わったが、誓願自体を例示ほど述べよう。」

なぜこのような観点によって、著作がなされたのかは明らかではない。しかし、後世のチベット撰述の記述であるが、そこで浄土思想一般とその中で、東西の二仏と二仏国土の特徴、信仰の性格が対照的に明示されたことは確かである。この視点¹⁰⁾は、浄土教ないし浄土經典の成立興起を考える際に、新たな手がかりにもなる。その場合には「極楽浄土」の西方という方位に主眼をおいて、その地理的、文化的な「起源」を求める実証的研究もある¹¹⁾。しかしそれは、西牛貨洲をも含んだ娑婆世界全体から見て、無限の西にあるものである。「起源」に偏って考察する姿勢には自ずと限界も生じよう。そこで、チョネ・タクパシェードゥプの著作に「極楽世界」「妙喜世界」という一組の国土が説

かれる点、「阿弥陀仏」「阿閼仏」という一組の仏が説かれる点、すなわちその「一組」という点に留意すれば、浄土教の成立興起に関する幾つかの、今後考察すべき問題点が浮かび上がってくる。以下に整理したい。

- ① 現存する最初期の浄土經典である、漢訳の『大阿弥陀経』と『阿閼仏国経』¹²⁾は翻訳時期がほぼ一致する。これは阿弥陀仏と阿閼仏との信仰が、遠くない時期の興起であることを推測させる。
- ② 漢訳の『大阿弥陀経』と『阿閼仏国経』との訳経僧（伝支謙訳と支婁迦讖訳）が共通するならば¹³⁾、両経が共通の部派に帰属していた可能性がある。内容が対照的で相補的でもある両経が、別々に成立・発展したことは想定し難い¹⁴⁾。
- ③ 方角の面からは、初期の時点から西方の阿弥陀仏、東方の阿閼仏という明確な方位観が示される。この方位観は、〈金光明経〉や〈阿弥陀経〉、そして後の密教の〈不空罽索神变真言经〉や〈金剛頂经〉へと継承されるが¹⁵⁾、インド浄土教の興起時代において、特に「西方の阿弥陀仏」についてはすでに周知されていたようである。例えば「西方の阿弥陀仏」については、支婁迦讖訳『仏説般舟三昧经（一卷本）』には「心念西方阿弥陀仏」（『大正蔵』13, No. 417, p. 905a）、「所聞西方阿弥陀仏説」（『大正蔵』13, No. 417, p. 905a）がある。しかし阿閼仏が登場する、例えば支婁迦讖訳『道行般若经』（『大正蔵』8, No. 224）、支謙訳『仏説維摩詰经』（『大正蔵』14, No. 474）には、阿閼仏は東方と結びつけられて説かれない¹⁶⁾。
- ④ 〈無量寿经〉と〈阿閼仏国经〉を承けて成立したと推測される、論書傾向を持つ〈文殊師利仏土厳浄经〉（竺法護訳が存在する。Cf. 『大正蔵』12, No. 318）には、行者自身による「仏国土の選択」が説かれている。自分が欲する尊格や、仏国土を個人の意志によって選択する点は、個人信仰「願いの神（Skt. iṣṭadevatā）」を彷彿させる（Cf. 中御門〔2013〕）。その意味において、同時代に登場した〈無量寿经〉と〈阿閼仏国经〉は、或る種、行者へ提示された二捨択一の選択肢ともいえよう。多文化が混

在したクシャーナ王朝時代に成立したと目される両経の登場基盤として、こうした「交替神教」の要素も考えられるのではないか。なお、この「仏国土の選択」という伝統は浄土教に深く関係しており、チベットでもカルマ・カギユ派のカルマ・チャクメー（1613-1678）の典籍にも出てくる（Cf. 藤仲〔2006〕）。

- ⑤ チベットの翻訳師智軍は国土の莊嚴を示す際に、〈無量寿経〉と〈阿閼仏国経〉を代表として挙げる¹⁷⁾。彼は九世紀に活躍した仏教者であるが、密教のマンドラにおけるこの東西二仏の受容を経たその時代には、両尊格を一組として認識する風潮があった。初期カダム派の頃からカギユ派の祖師の中でも、阿閼の仏国土へ往生を願う行者的性格の者が居た。例えばミラレパ（Milaras pa. 1040-1123）である。またシヨヌペル（'Gos lo tshā ba gShon nu dpal. 1392-1481）が編纂した『青史』（*Deb ther sngon po*）には、阿弥陀仏の極楽世界からのお迎えを断り、後に阿閼仏の妙喜世界へ往生した人の話が紹介される¹⁸⁾。これらは、チョネ・タクパシェードゥップによるこの著の先駆的ありようともいえる。
- ⑥ 阿弥陀仏の原語に出る「Skt.*Amita-」と、阿閼仏の原語である「Skt. Akṣobhya」¹⁹⁾は共に数の単位であり、無量・無数を意味する。共通の意味を有している。両者は、インド人には馴染み深い、互いを関係づけ連想させる「掛ことば」とも理解できる。ちなみに〈無量寿経〉自体にも、「Skt. Akṣobhya」は「無量」の意味で出るので、『同経』編纂者には「Skt. Akṣobhya」の二義（不動と無量）について認識があったといえる（Cf. 梵本 cp. 12）。阿弥陀仏について、「起点」となる原語自体は「Skt.*Amita」とは考えられないが、その「説かれ方」の傾向に注目すると、仏名中（Skt. Amitābha, Amitāyus）²⁰⁾の「光」や「寿命」という特徴だけでなく、その仏の「無量・無数」の存在である点が強調されている。藤田〔1970〕「浄土思想に言及する関係資料」（pp. 141-161）の「仏名」欄を参照すると、掲載された調査対象290典籍のうち、約230典籍において「阿弥陀（無量）」が阿弥陀仏の仏名として使用されている（そのうちの55典籍が、2つないし3つの別名を挙げる。例：『阿弥陀

経』阿弥陀、無量寿、『無量寿経』無量寿、無量光、無量)。

- ⑦ 両経典もかつての誓願や菩薩行、国土の建立を説くので当然とも言えるが、両経典には共通の素材や表現が確認でき、共通基盤の上に立っていることが推測される。つまり両者には有機的な繋がりがある。この点については、後の〈現観莊嚴論〉の冒頭では、〈無量寿経〉が説く阿弥陀仏を例として挙げて、誓願の完成、有情の成熟、国土の浄化という、浄土教の骨子を出す。
- ⑧ 両経典の説く、慈悲中心の阿弥陀仏、智慧中心の阿閼仏というような尊格の起源と存在は、釈迦仏の在世中と入滅後に関して相互補完的な役割を果たすかのような印象を与える。③にも繋がる問題であるが、釈迦仏を中央として、西方極楽世界の阿弥陀仏、東方妙喜世界の阿閼仏という、或る種マンダラ的な三尊形式をも類推させる。

この項の終わりに、方角と結びついた「起源」に偏って考察する姿勢について、あらためて問題提起したい。浄土教が興起した時点では、方角と国土との間の必然性がさほど濃密ではなかった可能性が考えられる点である。というのは、極楽世界と阿弥陀仏はまず、無限の十方世界での現在仏とその仏国土なのであり、その方向は西とされていても無限の彼方であり、この娑婆世界とその住人の地理的方向感覚をはるかに超えている。その地理的な方位が強く意識されるのは、時代が下がって密教の段階、あるいは中国浄土教(道綽(562-645)、善導(613-681))の段階である。事実、東の阿閼仏の妙喜世界の起源を、インド世界からみた「東方」に求める実証的研究を、寡聞のゆえか筆者は確認していない。後世の説ではあるが、インド仏教圏において浄土教が密教と融合する過程に成立した〈無量寿宗要経〉においては、仏と国土の名称を少し変更して、国土の方向も西方から上方に変更される例すらある。いわば「空雲の上にある」ものと捉え直されている²¹⁾。

今後さらに検証すべき問題も多くあるが、筆者は以上の諸点より、浄土教の成立興起を考える際には、両尊格と両仏国土が一組のものとして登場した点が重要であると考えている。

試訳にあたって

論述の形式一般については、先に示した藤仲、中御門〔2007〕に倣った。底本としては、*Co ne grags pa bshad sgrub kyi gsung 'bum*, dPyad gzhi'i yig cha phyogs bsgrigs (天津古籍出版社) Vol. 44 (A Zhing-bkod 1a-10a, pp. 112-116) を使用した。蔵訳〈無量寿経〉を参照する場合には、佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編〔1999〕、『浄土宗全書』23を利用した。本文において使用する見出し語は、小野田〔1981〕を参照させて頂いた。なお小野田〔1981〕pp. 155-156の註記には、『最上国開門』と蔵訳〈無量寿経〉との対応箇所が註記されている。本作と、『最上国開門』並びに蔵訳〈無量寿経〉との詳細な対応関係を確認する際にも、同論を参照されたい。

【試訳】『極楽国土の莊嚴の話 ―その国土に往く階梯―』

(1a) 『極楽国土の莊嚴の話 ―その国土に往く階梯―』がございます。

(1b1.) マンジュゴーシャに帰命します。

(0.1. 帰敬偈) (1b1ff.)

(阿弥陀仏に対する敬礼偈)

真紅の色の珊瑚²²⁾のきわめて美しく見て好ましく意を奪われるスメール山の〔ような〕身体、
きわめて燃え輝く光のマンダラの輪によって、全く取りまかれた、
残らず身体を持つ者、〔世の〕衆生すべてを浄土に導かれる、
一切智者の智・慈の大きな蔵〔である〕帰依〔処〕・依怙主無量光に対して礼拝する。

(0.2. 著作の宣誓) (1b2ff.)

無比の教主― 悲をもったあなたは、私など穢土の教化対象者たちを、死去したとき、最上のかの極楽国土に、悲の鈎によって必ず引導してください。あ

あ、かの主の国土の〔諸々の〕荘嚴を、『〔極楽国土の荘嚴の〕経』（無量寿経）に出ているとおりに要義を一方に、尊者〔ツォンカパ〕の説明する仕方のように、尊敬をもって少しを述べよう。

（序文）(1b4ff.)

それもまた一般的に、仏・世尊すべてにおいて、かつて国土を浄める加行（行動）を通じて成就した受用と変化との浄土（longs sprul gyi dag pa'i zhing）が二つずつ有ると説かれているが、受用身の国土においては眷属は聖者の菩薩のみによって満たされたの以外、凡夫は生じないし、それだけでなく、変化身の国土の或るものにおいても眷属は菩薩だけ、或る〔国土〕には凡夫が有る²³⁾が、〔そこに〕生まれる因は成就しがたいし、或る国土には生まれても再び悪趣への転落がありうるので、目的が成就しない。

〔他方、〕極楽と不動〔如来と〕の国土に生まれる因は成就しやすいので、この〔娑婆世界の〕国土の教化対象者が成就したなら、(2a) そこに生まれることを意趣なさって、教主〔釈迦牟尼〕はこの二つの『国土の荘嚴の経（*Zhing bkod gyi mdo*）』を別に（logs su）²⁴⁾広説なさったし（rgyas par bshad cing）、『大解脱経（*mDo sde Thar pa chen po*）』にもまた

「私は、きわめて清浄な阿閼世界と極楽世界とを見ると、「苦」という名もない。」

と説かれている。特に²⁵⁾、多くの経と、陀羅尼の儀軌（Tib. rtog pa, Skt. kalpa）における利徳を述べた個所に「極楽に生まれる」と多く説かれているのである。したがって〔ここではそのうち〕『極楽国土の荘嚴（*bDe ba can zhing bkod*）』の心髄をまとめて説明しよう。

（往生の因1）(2a3ff.)

その国土に生まれる因を、その『経』（無量寿経）にお説きになったのは、

「アーナンダよ、有情〔たちである〕或る者—〔すなわち、〕(1) かの如来を形相から（rnam pas）たびたび作意するのと、(2) 多くの無量の善根を生じさせるのと、(3) 菩提に発心する、廻向して、(4) その世界に生

まれるよう誓願を立てる者たち— 彼らが死ぬときに近く住するならば、如来・応供・正等覚者・無量光仏が多くの比丘衆によって取りまかれて、面と向かって、住された。彼らは世尊無量光が見えて、浄信の心 (rab tu dang pa'i sems) をもって死去し、極楽世界こそに生まれるであろう。」²⁶⁾ といふのから、

「彼らは如来を見てから浄信を縁じた等持 (三昧) と、不忘の念をもって死去してから、かの仏国土こそに生まれるであろう。」²⁷⁾ (2b)

といふまで²⁸⁾を〔往生の因を説く箇所〕にお説きになった。意味をまとめると、

1. 無量光仏をたびたび念じて名から唱えることと²⁹⁾
2. 多くの善根を積むことと
3. 菩提に発心することと
4. 積んだ諸善根をかの国土に生まれるために廻向することと
5. その国土に生まれたい意欲 ('dun ba) をもって誓願を立てることと
6. 国土の器〔世間〕・有情〔世間〕の功德の莊嚴が『経』(無量寿経、阿弥陀経) に説明されたように念ずること、である³⁰⁾。

「菩提に発心すること」は、大乘の種姓を有する者 (theg chen gyi rigs can)³¹⁾に生まれるためであるが、他は〔大乘・小乗〕共通のことに關してである。特に、その国土こそに生まれたい強力な意欲は、そこに生まれる因の中心であると〔『最上国開門』〕に説明されているし、それだけではなく、その国土に生まれることへの障碍を為す諸々の悪作 (nyes)・墮罪 (ltung) を懺悔することについても勤めることが必要である。

「その国土に生まれたなら、喜ばしい」と思うには、国土の功德を知ることが必要なので、ここに最初に国土の讚を述べよう。

それについて、〔まとめの偈頌として〕このようにいふ。

かのきわめて賢れた最上の浄土に、

たびたび生まれる因³²⁾、

それらは何々を成就したなら、

まさにそこに必ずや生まれることについて、何の疑いがあるか。

という、〔以上が、極楽浄土に〕生まれる因を述べた個所である。

(器世間としての功德) (2b5ff.)

娑婆国土から西方に〔向かい〕多くの仏国土を過ぎたなら、「極楽」という稀有なる最上の国土が有る。それは大地が多くの宝によって飾られている。きわめて喜ばしく、掌のように平らである。宝から成就した山以外、〔娑婆世界を取りまく〕黒山〔のような山〕などすべてを欠如し、清浄である。好ましく清浄な国土の辺際は、七宝の樹と、(3a) 多羅の樹の列によって取り囲まれている。〔例えば、〕月が星によって〔取り囲まれている〕ように。

(宝樹の功德) (3alff.)

そのような大地それは、多くの種類の樹木によって美しく造られているし、樹木の各々にも根と、〔幹と、〕枝と、葉と、花卉と、花と、果という七つが各々有る〔。そのうち、〕根は金、幹は銀、枝は昆瑠璃、葉は水晶、花卉は琥珀、花は赤真珠、果は瑪瑙〔という宝〕から造られている。或る〔樹木〕は、根など〔根、幹、枝、葉、花卉、花、果〕七つが〔七宝の〕一つ一つの宝から造られており、同様に二〔種類〕から〔造られたもの〕や、三〔種類〕や、四〔種類〕や、五〔種類〕や、六〔種類〕から造られているのや、根など一つ一つも七宝すべてから造られたものが有る。

そのようなものなどの〔諸々の〕樹木に、冠と、耳飾りと、肩飾りと、手首の輪と、腕飾りと、指輪と、金の腰帯と、金の網と、真珠の網と、宝珠の鈴など莊嚴 一望むとおりの幾百千の宝の莊嚴によって飾られて、垂れ下がったものによって、かの仏国土は全く満たされているし、朝の時刻（晨朝）、四方から風が起こって、天のきわめて芳しい様々な芳香によって薫じられて、多くの顯色 (kha dog) を具えた宝樹それらを揺らすし、促したなら、〔鈴やシンバルの〕響きわたる声と、好ましい芳しい香りをもって生ずる。見ると好ましい多様な花が宝の大地に散る。それらの花 (3b) によって、かの仏国土は人の背丈七つほどを満たすであろうし、それらの花はカチリンダ天衣のように柔らかくて触れると安楽である。それに足を置いたなら、四指ほど下がるし、足を

上げたなら、四指ほど上がるであろう。朝の時（晨朝）が過ぎたとたんに、古びたそれらの花は残らず無くなるであろう。その後にかの仏国土は空寂で（閑寂 dben pa）、喜ばしく、浄らかになるであろう³³⁾。それからまた³⁴⁾、四方から風が起こって、以前のように新しい花々を開くのである。朝の時（晨朝）のとおりに、真昼（日中）と、午後（日没）と、夕べ（初夜）と、真夜中（中夜）と、夜明け（後夜）もまた同じである。

〔まとめの偈頌として〕 このようにいう。

金、銀、昆瑠璃と、水晶、
琥珀と、赤真珠、瑪瑙、

〔すなわち〕 宝から成った樹において、

意に思うあらゆる良い荘嚴（dgu rgyan bzang）が垂れ下がる。

樹の根、幹、枝などは、

柔らかくて、触れると安樂を与え、芳しい香りを具えている。

香りの乗物（dri yi bzhon pa.風）によって揺れるとき、耳に聞きやすい、聴聞によって飽きることがない〔諸々の〕声（sgra）が出る。

〔以上が、〕 大地を美しくする樹の功德を述べた個所である。

（宝水の功德）（3b5ff.）

さらにその大地は、最高の香によって全く薫じられた様々な種類の河によって美しくされたが、諸々の〔河の〕水の深さとしては、十二由旬ほどであり、幅（zheng）³⁵⁾としては一由旬から百千〔由旬〕までのものがある。それもまた〔河の水へ通じる〕階段は安樂であり、泥は無く、金の砂が敷かれて、天の青蓮華（ウトパラ）の花と、蓮華（パドマ）と、睡蓮（クムダ）（4a）と、白蓮華（パドマ・カルポ）などの、香りがきわめて芳しい〔諸々の〕花によって覆われている。〔河の〕周辺には雁と、鷺鳥と、鶴と、紅鴨と、カーランダバ鴨と、オウムと、黒鴨と、ホトトギスと、インドカッコウと、迦陵頻伽^{かりようびんが}と、孔雀などの、好ましい声（sgra）を出す変化の鳥の多くの集まりが仕える³⁶⁾。兩岸は宝樹によって満たされている。

〔まとめの偈頌として〕 このようにいう。

深く広大な水の大きな蔵 (chu gtar chen po.大河) は、
様々な蓮華によって飾られているし、
妙なる声を出す変化の鳥、
〔すなわち〕雁と鷺鳥などによって美しい³⁷⁾。
淨らかな〔心を持つ〕有情たちの生活の基 (nyer 'tsho'i gzhi)、
意を執らえる多磨羅と沈香、
多伽羅 (rgya spos)、栴檀、蛇心檀香によって薫じつけられた
諸々の河の流れは、妙なる音を鳴らして流れる。
〔以上が、〕大地を美しくする〔河の〕水の功德を述べた個所である。

(宝蓮華の功德) (4a4ff.)

さらにあらゆる大地は金の網によって覆われているし、七宝の蓮華によって満たされている。それもまた蓮華の或るものは半由旬ほど、或るものは一〔由旬〕、そして二由旬から五十³⁸⁾由旬の量ほど〔の大きさが〕有る。あらゆる宝の蓮華から三千六百の百千コーティの光が生じて³⁹⁾、光の先から仏陀の身—金色を具え〔三十二の〕相好によって荘厳されたもの、三千六百の百千コーティ〔の変化〕が生ずる。十方の無数無量の諸世界に行かれて、有情たちに法を説く。(4b)

〔まとめの偈頌として〕このようにいう。
広大な誓願から来たった、
蓮華から生じた光の先に、
すばらしく広がった勝者は、正法の
甘露によって教化対象者を満足させる。
〔以上が、〕大地を美しくする蓮華の功德を述べた個所である。

(宝楼・資財の功德) (4b2ff.)

さらにその大地は、諸々の宮殿 (khang) によって美しくされている。そ〔の宮殿〕もまた、様々な宝の百千の楼閣 (ba gam) によって荘厳されている。〔虚空は〕宝座—作られた (bcos bu. 織られた) 種々の天の布が敷かれ

ていて、模様のついた枕 (sngas)⁴⁰を具えた、〔そうした宝座の有る〕多くの無量宮 (gzhal med khang) 〔が有り〕、さらにそこには⁴¹香と、華鬘と、塗香と、抹香と、蓋と、幢と、幡と、奏楽と、幾百千の様々な^{いろ}顯色の衣、〔すなわち〕望むとおりの香などによって完全に満たされている。同様に種々の香、芳しい香りが立ち昇るし、時々には、天の香水の雲の雨と、すべて〔の顯色〕を具えた天の花と、天の七宝と、〔天の〕梅檀の粉と、〔天の〕蓋、〔天の〕幢と、〔天の〕幡の雨が降る。そして虚空には天の華鬘と、仏子のついた蓋 (gdugs rnga ma'i bsil yab dang bcas pa) が保たれ (浮かんでおり)、天の奏楽の音を響かせて、天女たちも舞う。

〔まとめの偈頌として〕このようにいう。

意^{こころ}の願いを円満にする

財産 ('byor pa 円満具足) によって、地と空中のすべては、

すべて満ちている。大地の範囲には、

収まらず、虚空に掲げたように。

〔以上が、〕大地を美しくする莊嚴の宮殿と受用の功徳を述べた個所である。

(5a)

(一般的な功徳 (有情世間の功徳)) (5a1ff.)

そのように器〔世間〕の功徳を述べてから有情〔世間〕の功徳は、その国土に関しては、三悪趣と阿修羅の類は無いし、その国土に生まれたかぎりには、〔それら不幸な〕四つの趣そのものに再び退転することが無いし、〔八難のうち〕他の難も無い。そこには不決定と邪決定の有情 (不定種と邪定種) は無いし、あらゆる者が〔菩薩の種姓として〕正性に決定した者 (正定種) のみである。誓願の力以外、時ならぬ死も無いし⁴²、そこに生まれた有情たちは宝の蓮華から化生したものばかりであり、〔極樂の住人の〕趣は天・人の二つに決定しているが、それもまた「天」・「人」という言説〔の相違〕ほどもを除いて⁴³〔勝義としては〕等しい。受用は他化自在天たちのおりである。あらゆる彼ら有情は、身体については三十二相によって莊嚴されて、心によって一刹那においてコーティ・ナユタの国土などに往くことができる神變通と、コーティ・

ナユタの劫などを随念する宿住随念通と、百千のコーティ・ナユタの世界が見える天眼通と、百千のコーティ・ナユタの国土などの声を聴く天耳通と、百千のコーティ・ナユタの国土に属する有情たちの心を知る他心通との五神通を揃えて得ている。そして、朝のすべてに他の諸仏国土に行ってから、(5b) 幾千の多くの仏に対してあらゆる供養の資具によって供養できる。けれども疑いを抱きながら生まれた業によって、蓮華の弁に長い間に住することが必定な者たちには、五神通は揃っていないし、他の国土における諸々の如来を供養しに行く能力も無い。彼ら有情は、粗大な食べ物を食べないが、食べ物の種類は望むとおりの食べ物と、衣服・荘嚴は望むとおりのものを、〔心に〕思ったとたんに生じさせて、身体は満足し、荘嚴によって美しくなるのである。さらに以前に説明した、それらの大きな河から〔出る〕天の河音は、百千のコーティの支分を具えた、巧みな音楽師が造った〔音楽〕よりも勝れた妙なる好ましい〔諸々の〕音 (sgra) が生ずるし⁴⁰、その〔音〕から無量の法門が種姓 (rigs) に応じて示され、変化の鳥の集まりによっても仏国土すべてを〔発する〕法の声 (sgra) によって理解させるし、それによって〔極楽の住人である〕諸菩薩は仏随念 (sangs rgyas rjes su dran pa) を離れなくなるのである。彼ら有情には、以前に説明したような無量宮が望むとおりの面前に生じている。彼らはその無量宮の中において、七千ずつの天女によって取り囲まれて、遊び、楽しむのである。

〔まとめの偈頌として〕このようにいう。

清浄な〔心を有する〕有情は善き業によって
良く変化し、身体は相好によって美しい。
多くの功德によって自相続は満たされている。
常に法の喜びをもって生活する。

(6a) 雷電のように刹那に、障碍無く化作によって
多くの国土に赴いて、勝者の面前において
広大なる〔福智の〕二資糧を生じさせて、再び
自らの国土へその喜びによって遊戯なさる。

〔以上が、〕有情〔世間〕の国土を美しくする共通の功德を述べた個所であ

る。

(眷属の功德) (6a2ff.)

さらに、その国土の勝者の眷属は二種類、〔すなわち〕声聞と菩薩である。

(声聞の功德) (6a2ff.)

その声聞は、第一の集まりほどでも、三千〔大千世界〕の星すべてを一日でもって数えられる能力の大神通力のマウドガリヤーヤナのような者、〔そうした〕百千のコーティ・ナユタの者が百千のコーティ・ナユタ年において他の仕事をせずに数えても、数の一分ほども数えることにならない〔。それ〕ならば、第二〔の集まり〕と第三の集まりの数はもちろんである。その無数の声聞の誰しも、光は一尋^{ひろ}であり⁴⁵⁾神通を具えた者のみである。

(菩薩の功德) (6a4ff.)

菩薩の眷属は、無数無量であり、無辺の功德を具えた者だけである。それもまた、すべてに対して無量の等しい大慈を具えている。智慧 (ye shes) は大きな海と等しい。等持はスメール山と等しい。智恵 (shes rab) は日月と等しい⁴⁶⁾。二資糧を積んだのは水の蔵〔である海〕と等しい。大きな忍は地と等しい⁴⁷⁾。煩惱の垢を洗うから水のようなもの。業と煩惱という樹木 (ljon shing) を焼くから (6b) 火のようなもの⁴⁸⁾。世間の流儀に執着しないから風のようなもの。一切法は自性によって認得されないのを了解するから虚空のようなもの⁴⁹⁾。輪廻の過失によって染まらないから蓮華のようなもの。法の大きな音声を轟かせるから大きな雷鳴のようなもの。法の雨を降らせるから大きな雲と似ている。大衆を圧倒するから〔抜群なる〕牛王と似ている。心をきわめて調伏したから象と似ている。身心を最高に調伏したから駿馬と似ている。所対治分に対して無畏であるから獅子と似ている。有情を苦悩から救護するからニグローダ樹 (溶樹) のような者。対論者 (phas kyi rgol ba) によって動揺させられないからスメール山のような者。無量の大慈を修習したから虚空のような者。清浄な法を成就することに先行するから大梵天のようなもの。依処

(gnas) に滞ること (sog pa) が無いから鳥のような者。敵対者を敗るからガルーダのような者。世間には出現し難いから優曇華（無華果、ウドゥンバラ）と法 (chos 性質) が等しく、法の太鼓を打つ。法の螺貝を吹く。法の幢を掲げる。法の幡を持つ。法の灯明を輝かせる。幾百千のコーティ・ナユタの多くの諸仏のもとで善根を生じ、一切諸仏によって賞讃される。戒は清浄である。聴聞は海のようなものである。勝者の子の各々も百千のコーティ由旬の光を (7a) もつ。長子〔である〕観自在と大勢至の光は、その〔極楽〕世界の辺際〔まで〕を満たす。

〔まとめの偈頌として〕このようにいう。

大海のような智慧に住し、

海のような勇気の鎧を纏っている。

海のような勝者の御足のもとに、

海のような聴聞を満足しないで求める。

あらゆる法の理趣を求めることにきわめて善巧である。

出世間の談話の心髄を証得している。

法の談話について、いつも怖れが無い。

常に有情を解脱させることに精進する。

かの導師である正尊〔である〕無量光、

かの最上の牟尼の種姓に生まれたし、

勝者の後継者、名声をもった勇者である、

浄土の勝者子たちを、賞讃する。

〔以上〕それらが、眷属の声聞と菩薩の功德の一分ほどを述べた個所である。

（無量光仏）(7a4ff.)

そのような器・有情〔世間〕の究竟の功德を具えたかの最上の国土の中央に、菩提樹の大王は高さとして千六百由旬ある。枝と、葉と、花卉は八百由旬⁵⁰⁾まで (tshun chad) 垂れている。根の太さと長さは五百由旬ある。葉と、花と、果が常に垂れていて、多く幾百千の異なった顯色^{いろ}を具えている。葉、実、花も多くの違い（種類）を持っている。月のように輝く宝珠は全く明瞭である。海

の宝珠と、シャクラが (7b) 持った宝珠 (brGya byin gyis thogs pa'i nor bu) によって飾られているし、如意宝珠によって満たされている。その樹には金の糸と、真珠の飾り (se mo de) と、宝の束 (rin po che'i chun po) と、一つ的首飾り⁵¹⁾ (do shal chig rkyang) と、紅白の真珠の鬘 (mu tig dkar dmar gyi phreng ba) と、獅子の口から垂れた腰帯 (se nge'i kha nas 'phyang ba'i ska rags) と、様々な宝の網と、鈴 (dil bu)、振鈴 (gyer kha) と、卍字と半月 (zla gam) など多くの種類によって荘厳されている。その菩提樹が風によって揺れたなら、音声 (sgra dbyang) が生ずる — それによって無量の諸世界をも理解させて (go bar byed la)、誰かがその樹の声 (sgra) を聞いて、見て、香りを感じ、果を味わい、その光によって触れられた— [すると] そのすべて [の者] は、菩提まで眼と耳と鼻と舌と身の病が生じない。その樹を意に思^{こころ}う彼らも、菩提まで心が散動をもった者にならない。

[まとめの偈頌として] このようにいう。

きわめて多くの福德の大地から生じた

きわめて善い菩提樹の王は

揺れて、枝、葉、実をもち、

きわめて妙なる法の音声を轟かす。

すべての必要な望むものが生ずる処。

あらゆる [身体を持った] 有情の愚痴を除く、

様々な大きな宝と、

色々な衣によって荘厳されている⁵²⁾。

[以上] それらが、菩提樹の功德を述べた個所である。

その菩提樹の王のもとには、如来・応供・正等覚者無量光 [仏] が (8a) おられる。とどまり、過ごし⁵³⁾、法を説かれる。それも御寿命は、「百千のコーティ・ナユタの劫これほど生きる」といって、寿命の量の辺際を了解することはできないから「無量寿 (Tshe dpag med)」という。コーティ・ナユタのガンジス河の砂ほどの諸仏国土を、身体の光によって遍満し、照らすから、「無量光 ('Od dpag med)」と「無辺光 (sNang ba mtha' yas)」という。け

れども教化対象者の側には〔変化身として現れて〕光は〔声聞と同じ〕一尋などとして示すことがありうるし、光が他の諸国土に遍満するが、ふつうの者（tha mal pa）は〔それを〕見るができない。その光は、水晶のように無垢であり、虚空の広さのようにきわめて広大である。身体には安楽、そして心には喜びを生じさせるし、それに触れた有情たちは最高に歓喜する。そのように、無辺であり遊戯する光明の大きな蘊によって⁵⁴⁾、〔娑婆世界の〕海が〔辺際の〕金の山々によって覆われたごとくに、全く取り囲まれた身体の威光によって、すべての声聞と菩薩との眷属衆を圧倒して、勝れている。煌々と全方向を明らかに照明するのは、山王スメール山が、あらゆるスメール山の中央において勝れていて、高いようなもの。かの勝者の身体は、無量の福德の集まりによって生じた三十二の相と八十の随好によって飾られている。秋時の月が（8 b）雲を離れ、虚空の中央に星の集まりによって囲まれて、煌々と勝れているように、明らかで円満な相好によって飾られた最高の身体は、功德の集まりが豊富な無量の菩薩衆によって囲まれた中央において、きわめて輝いて美しいので、勝れている。きわめて調伏された牛王 一百千の従う牛を伴ったもののように、化作の神通などによって、戯れる阿羅漢の衆が面前に並んでいる。十力と所知のすべてに障碍・罣礙が無い智慧と、無尽の弁才は途絶えることがなく、無辺の〔世の〕衆生の利益を為さる大悲が常に在る。獣の王ライオンが眷属衆の中において、恐れることなく声（sgra）を轟かせるように、無数の眷属の中央において四無畏によって怖れることなく、甚深で広大な法の大声を途絶えることなく轟かす。そのようなやり方によって、あらゆる〔世の〕衆生を繁榮と至善の位に立たせる。

それについて、〔まとめの偈頌として〕このようにいう。

広大な二資糧から生まれた、
きわめて美しい相好によって飾られた身体、
真紅の珊瑚のスメール山のように、
最上である（rab mnga'）眷属の中央において美しい。
極楽国土における〔世の〕衆生の帰依〔処〕。

〔菩提〕樹の王のもとにおける無量光〔仏〕は（9a）

広大な眷属衆の中央において輝く⁵⁵⁾身体。
無辺の福德の蘊〔である〕あなたを礼拝する。
最高の山王スメール山は
きわめて広大であり、月のような〔顔を〕持ち、
きわめて美しい、青い優曇華〔のような〕眼を、
きわめて具えたならば、あなたと等し〔くなるであろう〕。
光によって無量の諸国土をすべて満たす。
知る智慧は所知のすべてを満たす。
悲は偏り無く〔世の〕衆生を満たす。
事業が起こるのは、有の辺際までを満たす。
きわめて多いこの〔世の〕衆生すべてが、
きわめて明らかな日月の照明を持ってから、
きわめて努力して求めても、
最高のあなたと似たものをどこに得られるであろうか。
この娑婆国土のあらゆる功德を、
あなたは摂取してから、自らが造られたから、
あなたの国土の功德の莊嚴は円満になった。
この国土は五濁によって汚されているのかと思う。
広大な〔諸々の〕浄土はあるが、
きわめて多くの濁世のこの〔世の〕衆生すべて
最高のかの国土に来たいと願った者を、
きわめて慈しむ悲によって引導される。
きわめて多くの〔世の〕衆生を慈しむ悲によって、
きわめて多くの誓願を立てたことの果が熟した。
きわめて多くの安楽・幸福のすべてを生ずるもと ―そこに、
きわめて多くの (9b) 祈願する者たちをも導いてください。

〔以上〕それらが、国土の正尊〔である無量光仏〕の功德の一分ほどを述べ
て、^{こころ}意の願いを祈願する個所である。

(強い欣求の重要性) (9b1ff.)

国土の功德は広汎には『国土莊嚴經 (*Zhing bkod gyi mdo*)』(無量寿經)から知るべきであるし、そのように知ってから、そこへの生を望む意欲 ('*dun pa* 願樂) をたびたび修治したことの利徳は、『同經』(無量寿經)に、

「誰かが極微ほどの世界を
壊し碎いて微塵にした。
それより多い〔無数の〕世界に
宝を満たして施しを与えたことによって〔も〕、
誰かが無量光の名と、
極楽〔世界〕の勝れた諸々の功德を
見たとき喜んで合掌する
—この福德の一分にもならないのである。」⁵⁶⁾

というのから、

「誰かが⁵⁷⁾極楽世界の
名を聞いたことの福德、それに対して、
最上の国土の大きな地域、それらすべては、
部分と喩えにもならないのである。」⁵⁸⁾
とお説きになったのがある。

(往生の因 2) (9b5ff.)

その国土に生まれる因は、以前に述べたとおりである。それらの中では経と、陀羅尼の儀軌 (*Tib.rtog pa, Skt.kalpa*) にお説きになったさまは、『薬師經 (*sMan bla'i mdo*)』に薬師 (*sMan bla*) の名を述べたなら、極楽 (*bDe ba can*) に生まれることと⁵⁹⁾ (10a)、『普賢行願讚 (*bZang spyod*)』にその誓願を述べたなら、極楽に生まれることと、『白傘蓋 (*gDugs dkar*)』の守護輪⁶⁰⁾の利徳の個所に、それを唱えたなら、極楽に生まれることと、『尊勝仏母儀軌の陀羅尼 (*rNam par rgyal ma'i rtog pa gzungs*)』⁶¹⁾の利徳を述べたものは、陀羅尼の儀軌 (*gzungs kyi cho ga*) とその陀羅尼を述べるならば、極楽に生まれることになる、とお説きになったようなものである。他〔の典籍に〕も多

い。

(極楽浄土に生まれる方便、因の誓願) (10a2ff.)

そこに生まれる方便、または因の誓願は、尊者〔ツォンカパ〕自身が造られた『極楽誓願 (*bDe ba can gyi smon lam*)』〔、すなわち〕広大で周知されたもの (*rgyas pa yongs grags*) と、要約するならば〔『同願文』に〕「いつか寿命の行 (*'du byed*) を捨てるなら」などという二偈頌⁶²⁾と、『普賢行願讚』〔vs. 57-60〕に「私が死ぬ時になったなら」というのから「有情たちに多くの利益を為しますように」というまでの四偈頌⁶³⁾である。

(廻向文) (10a4ff.)

この方軌について、如理に私が勤めた
多様な白〔善〕のあるだけすべてを、
生々に浄土に生まれてから、
きわめて速やかに、仏陀〔の位〕を得るために廻向する。

(奥書) (10a5ff.)

これもまた、釈迦の比丘タクパ・シェードゥプが浄信をもってチョネ寺において編纂した〔。その〕筆受者は、ターイ・ラルン・ロサン・ドンドゥブ (*Tā yi la lung Blo bzang don grub pa*) である。吉祥たれ。

【主な参考文献】

小谷信千代

・『世親浄土論の諸問題』(東本願寺、2012)

小野田俊蔵

・「ツォンカパ造『最上国開門』試訳 ―チベットに於ける本願思想受容の一例として―」
(『仏教文化研究』27、1981)

香川孝雄

・『無量寿経の諸本対照研究』(永田文昌堂、1984)

・『浄土教の成立史的研究』(山喜房仏書林、1993)

梶浜亮俊「ツォンカパ著『極楽への誓願文』の研究」(『大阪工大摂南大学中研所報』23-3、

1991)

辛嶋静志

- ・「阿弥陀浄土の原風景」(『佛教大学総合研究所紀要』17、2010)

佐々木大樹

- ・「仏頂尊勝陀羅尼概観」(『現代密教』20、2009)
- ・「三陀羅尼」(高橋尚夫、木村秀明、野口圭也、大塚伸夫編『初期密教 思想・信仰・文化』、春秋社、2013)

定方晟

- ・「アマダ仏の起源」(『浄土思想』(「講座大乘仏教」5)、春秋社、1989)

佐藤直実

- ・『藏漢訳『阿閼仏国経』研究』(山喜房仏書林、2008)

高崎直道

- ・「ツォンカパのゴートラ論」(『如来藏思想II』、法蔵館、1989)

田中公明

- ・『両界曼荼羅の誕生』(春秋社、2004)

ツルティム・ケサン、小谷信千代

- ・「チベットの浄土教 —民衆の宗教—」(武内紹晃、ツルティム・ケサン、小谷信千代、ツルティム・ケサン、藤仲孝司
- ・「チベット撰述 金剛般若経註 解脱に往く善き道・甚深なる義の明らかな太陽 —チヨネ・タクバシエードゥップ著の和訳研究—」(大本山成田山新勝寺成田山仏教研究所、2010)

ツルティム・ケサン、小谷信千代

- ・「チベットの浄土教 —民衆の宗教—」(武内紹晃、ツルティム・ケサン、小谷信千代、桜部建『龍樹 世親 チベットの浄土教 慧遠』(「浄土仏教の思想3」)、講談社、1993)
- ツルティム・ケサン、山田哲也
- ・『チベットの密教ヨーガ』(文栄堂、1999)

高橋尚夫

- ・「薬師如来の大願と真言について」(『大正大学研究論叢』12、2005)

釈舎幸紀

- ・「無量光仏礼讃文をめぐって(序説) —その解説と和訳—」(『高田短期大学紀要』3、1985)

ツルティム・ケサン、藤仲孝司

- ・『ツォンカパ菩提道次第大論の研究II』(UNIO、2014)

長尾雅人

- ・『撰大乘論 和訳と注解(下)』(講談社、1999)

中御門敬教

- ・「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究(2) —陳那、釈友、智軍の〈普賢行願讃〉理解 普賢行願区分の章(8章1節—8章10節)—」(『浄土宗学研究』34、2008)

- ・「カルマチャクメーの浄土思想とその影響 —ギェルケンポによるカルマチャクメー作『清浄大楽国土誓願』簡略版—」(『佛教大学総合研究所紀要』16、2009)
- ・「阿弥陀仏信仰の展開を支えた仏典の研究(7) —陳那、釈友、智軍の〈普賢行願讃〉理解 廻向の善の章、廻向文(10章2節1項—廻向文)—」(『浄土宗学研究』39、2012)
- ・「文殊の誓願行と浄土経典 —〈文殊師利仏土厳浄経〉所説の「菩薩の学処」「大波濤誓願」「往生説」—」(『印度学仏教学研究』62-1、2013)

中村元

- ・『古代インド』(講談社学術文庫、2011)

野口圭也

- ・『葉師経』(高橋尚夫、木村秀明、野口圭也、大塚伸夫編『初期密教 —思想・信仰・文化—』、春秋社、2013)

兵藤一夫

- ・『般若経釈 現観莊嚴論の研究』(文栄堂、2000)

藤田宏達

- ・『原始浄土思想の研究』(岩波書店、1970)
- ・『梵文和訳 無量寿経・阿弥陀経』(法蔵館、1975)

藤仲孝司

- ・「カルマ・チャクメーの阿弥陀仏信仰と選択」(『佛教大学総合研究所紀要別冊 浄土教典籍の研究』、2006)

藤仲孝司、中御門敬教

- ・「阿閼仏に関するチョネ・ダクパシエードゥプの信仰と実践」(『佛教大学総合研究所紀要』14、2007)

佛教大学総合研究所「浄土教の総合的研究」研究班編

- ・『蔵訳無量寿経異本校合表(稿本)』(佛教大学総合研究所、1999)

佛教大学総合研究所編

- ・『浄土教典籍目録』(2011)
- ・R. Thurman

Prayer for Rebirth in Sukhavati by Je Tsong Khapa written in 1395—Library of Tibetan Works and Archives, The Life and Teachings of Tsong Khapas,1982

付記：本稿は藤仲孝司氏との共同研究の成果の一部である。古角武睦氏からは有益な御助言を頂いた。

註

- 1) 詳細な解題については、佛教大学総合研究所編〔2011〕pp. 88b-89aを参照のこと。
- 2) 詳しい彼の略伝記の紹介は、ツルティム、藤仲〔2010〕pp. 2-5を参照のこと。
- 3) 現在の、甘粛省甘南チベット自治区にある。

- 4) 「経典要約 (mdo bsdus)」とは、チベット仏教における説示の一ジャンルである。例えば、作者不明の『「大楽世界の荘厳」という大乘経典の要約 (*bDe chen zhing bkod zhes bya ba theg pa chen po'i mdo bsdus pa*)』(bKa shis 編、*bDe smon phyogs bsgrigs stod cha* (祝詞集上巻)、Si khron mi rigs dpe skrun khang (四川民族出版社、1944) pp. 138-139) や、リクジン・ツェーワンノルブ (1698-1755. Rig 'dzin Tse dbang nor bu) 著『極楽荘厳の経の義のとおり誓願 (*bDe ba bkod pa'i mdo don ji bzhin pa'i smon lam—Thar pa'i sgo 'byed—*)』(*ibid.*, pp. 140-149) がある。前者の解題については佛教大学総合研究所編 [2011] p. 78、後者については *ibid.*, pp. 82-83 を参照。なおチベットにおける代表的な極楽願文である、カルマ・チャクメー作『清浄大楽国土誓願』に対する「改作」的なものが、ギェルケンポ (1762-1837) 著『極楽国土経』である (Cf. 拙稿 [2009])。『Stk. sūtra, Tib.mdo』の多義性については *ibid.*, p. 246, p. 260ff. を参照のこと。
- 5) 書誌情報を含む解題については、佛教大学総合研究所編 [2011] (pp. 91b-92a) を参照。北京版のツォンカパ全集 (Tsong kha pa bka' 'bum II) の対応は、No. 6072, Ga.87b6-102a4 である。蔵文からの現代語訳は、小野田 [1981]、Thurman [1982]、釈舎 [1985]、梶浜 [1991]、ツルティム、小谷 [1993] がある。
- 6) Cf. 東北目録 No. 6944 (6) 詳細は佛教大学総合研究所編 [2011] p. 59 の「bDe smon」を参照。
- 7) 『最上国開門』は少善根による往生を取り上げないのだが、名号と荘厳への歓喜と、合掌による福德の大なることを『無量寿経』から引用している。一応、少善根への配慮は確認できる。本稿「強い欣求の重要性 (9b1ff.)」を参照。
- 8) 往生の「四因」を説く同様の文献類に以下がある。
- ・タラク・チャンチュブドルジェ (Grwa lag Byang chub rdo rje) 著『四因を通して大楽国土に生まれる誓願—一切相智の賢道— (*rGyu bzhi'i sgo nas bde chen zhing du skye ba'i smon lam—rNam mkhyen lam bzang—*)』(Cf. *bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社、pp. 280-291、1994)；佛教大学総合研究所編 [2011] p. 65a-b)
 - ・ハルハ・タムチク・ドルジェ (Hal ha Dam tshig rdo rje. 1781-1855) 著『世尊無量光主を供養し祈願する儀軌—善吉祥を与えるもの— (*bCom ldan 'das mGon po 'Od dpag med la mchog cing gsol ba gdab pa'i cho ga—dGe legs dpal ster—*)』(Cf. *Hal ha dam tshig rDo rje kyi gsung 'bum*, dPyad gzhi'i yig cha phyogs sgrigs (天津古籍出版社) vol. ?, Ga, 1a-32a, pp. 53-68；佛教大学総合研究所編 [2011] pp. 66b-67a)
 - ・ジャムゴン・ジュ・ミーパム・ギャムツォ ('Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho. 19c 後半-20c 初期) 著『極楽に生まれる四因の義 (*bDe ba can du skye ba'i rgyu bzhi'i don*)』(Cf. *Collected Writing of 'Jam mgon 'Ju Mi pham rgya mtsho*, by Sonam Topgay kazi, volume 6, [417 (Dhīh. 1a1-5)], Gangtok, 1976；佛教大学総合研究所編 [2011] p. 96a-b)
 - ・ジクメー・テンペーニマ (Jigs med bstan pa'i nyi ma. 1865-1926) 著『極楽願文 (*bDe smon*)』(*bDe smon phyogs bsgrigs stod* (四川民族出版社、pp. 263-264、1994)；佛教

大学総合研究所編〔2011〕pp.104b-105a)

- ・ トックジェ・シャンバン・ベルサン (Thugs rje gzhan phan dpal bzang.19c.) 著『清浄大楽国土の誓願の弁別釈 一大楽国土へ往く善き階梯 — (*rNam dag bde chen zhing gi smon lam gyi 'byed 'grel bDe chen zhing du bgrad pa'i them skas bzang po*)』(Cf. 東北 No. 7019 [1-82]; 佛教大学総合研究所編〔2011〕pp.116a-117a)
 - ・ ラクラ・ソナムチュードゥブ (Glag bla bSod nams chos 'grub.1862-1944) 著『大楽国土誓願の註疏 一解脱道を照らすもの (太陽) — (*rNam dag bde ba chen zhing gi smon lam gyi 'grel bshad—Thar lam snang byed—*)』(Cf. *The Collected Writings of Glag-bla Bsod-nams chos-'grub: The 1991 Dkar-mdzes Edition* (Delhi: Konchhog Lhadrepa, 1996)vols.5-6; 佛教大学総合研究所編〔2011〕pp.117b-118a)
- 9) 小野田〔1981〕pp.141-142の『最上国開門』構成表を利用させて頂いた。本稿の各項目も同論を参照した。
- 10) チョネ・ダクパシエードゥブ以外にも、イエシエデ (*ca.9c.*)、ギェルケンポ・タクパギェルツェン (1762-1836) も、阿弥陀仏と阿閼仏の両浄土を一組のものとして扱っている。
- 11) 例えば、極楽浄土の起源説の紹介については藤田〔1970〕pp.466ff.、定方〔1989〕を参照のこと。主要な外部起源説として、「ゾロアスター教」起源説、「ソコトラ島」起源説、「エデンの園」起源説、「エーリュシオン (Elysion) の野」起源説がある。仏教内部の起源説として、「大善見王神話 (転輪聖王神話)」、「北クル洲神話」、「天界神話」、「仏塔」との関係が指摘されている。インド一般神話の起源説として、「梵天神話」、「ヴァルナ神話」、「ヴィシュヌ神話」、「ヤマ神話」との関係が指摘されている。
- 12) 伝呉支謙訳『仏説阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道経』(=『大阿弥陀経』、『大正蔵』12, No. 362)、後漢支婁迦讖訳『阿閼仏国経』(『大正蔵』11, No. 313)
- 13) 直前の註を参照。そのうち『大阿弥陀経』の翻訳者については、大きく支謙訳説と支婁迦讖説とがある。支謙訳説を採る学者に平川彰氏、藤田宏達氏がいる。支婁迦讖訳説を採る学者に、北川賢浄氏、香川孝雄氏がいる。諸氏の見解を整理したものに、香川〔1993〕(pp.25-29)がある。
- 14) この点について、〈阿閼仏国経〉を集中的に研究した佐藤直実氏は、佐藤〔2008〕p.140「第4章結」において、「AV (阿閼仏国経)は、同時期の大乘仏教経典の中では阿弥陀仏信仰とは交流がなく、小品〈般若経〉と同系統であった。」と述べる。
- 15) Cf. 田中〔2004〕p.25,37
- 16) 方位との関係が希薄である。例えば後世の密教の〈秘密集会タントラ〉では、東方の阿閼が中央へ、中央の毘盧遮那が東方へという現象すら起こる (Cf. 田中〔2004〕p.37)。
- 17) Cf. 中御門〔2008〕p.23 〈行願讚〉智軍釈 v.14に出る。
- 18) Cf. 『青冊』上〔1984〕四川民族出版社、p.63、George N.Roerich, *The Blue Annals* 2, 1953, Calcutta, p.737

de'i slob ma rnams kyis chos 'di dar bar byed par 'gyur ro zhes lung bstan / bde

ba can du spyan 'dren pa'i pho nya byung ba la da lan mi 'gro gsung nas lo gsum
bzhugs / der bu slob rnam la nga mngon dgar 'gro bas der gsol ba thob cig gsung
nas zhi bar gshegs so //

Cf. 立川武蔵『トゥカン『一切宗義』カギユ派の章』（『西蔵仏教宗義研究』5、東洋文庫、1987、pp. 49-50）

- 19) Cf. Monier Williams, *A Sanskrit-English Dictionary*, p. 4a, Oxford, 1956

【a-kshobhya】mnf. immovable, imperturbable; (as), m., N. of a Buddha; of an author; an immense number, said by Buddhists to be 100 vivaras.

Cf. 山口益、舟橋一哉『俱舎論の原典解明 世間品』（法蔵館、1955、p. 464）

- 20) 辛嶋論文には、「*Amitābha*（無量光）から音変化で *Amitāyu* (*Amitāyus*)（無量寿）が生じたこと；「阿彌陀」の原語は、*Amitābha* の中期インド語 *Amitāha* / **Amidāha* であること」が指摘されている（Cf. 辛嶋〔2010〕p. 15）。

- 21) Cf. 佛教大学総合研究所編〔2011〕p. 40

『聖なる無量寿智と名づけられた大乘経典（*'Phags pa Tshe dang ye shes dpag tu med pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo*）』には、上方の無量功德蔵世界に無量寿如来が住していると説く。この経典を扱った研究に、池田澄達「梵文アパリミターユル陀羅尼經の校合」（『宗教研究』1-3,1916）がある。

- 22) 密教化された〈無量寿宗要經〉以降の、無量寿智仏の図像の特徴。

- 23) 基礎学である般若学（現觀莊嚴論）が示す「受用身」の五決定は、処決定、身決定、眷属決定、法決定、時決定である。ここの「眷属決定（受用身の国土には、住人として菩薩聖者のみが確定している）」が、この記述に該当する。「聖者の菩薩」とは、勝義の菩提心（空の智慧によって支えられた菩提心）を發した、初地歡喜地（見道以上）の菩薩である。声聞や凡夫への教化は、変化身に委ねられる。これら諸点は、もともと瑜伽行派で説かれることである（Cf. 兵藤〔2000〕p. 171、長尾〔1999〕p. 317）。

- 24) 「別に」とは、釈迦牟尼が意趣して、大乘一般を説く中で、特別に阿弥陀と阿閼の淨土を説いた、という作者の理解である。

- 25) 大乘全般については、「經」が顯教、「真言」が密教を表す。ここでは「Tib. gzungs（陀羅尼）」となっているが、通常は「Tib. sngags（真言）」を言うのであろう。

- 26) Cf. D. No. 258a7-b3、『淨全』23（p. 286,1.24-p. 288,1.6）

- 27) Cf. D. No. 258b2-3、『淨全』23（p. 288,1.15-16）

- 28) 『最上国開門』p. 234に挙がる、〈無量寿經〉に関する三段落のうち、第二段落を省略して挙げている。

- 29) 作意と称名を結びつける点については、小谷〔2012〕「b 仏身觀の加行としての称名（念仏即称名）」（pp. 107ff.）を参照。

- 30) これは〈無量寿經〉に依った『最上国開門』の四因のうち、第三因（菩提に發心して廻向すること）を二つに開いて第三因、第四因とし、第一因（如来を形相から作意すること）を二つに開いて第一因、第六因としたものである。

- 31) 極楽世界には、大乘者と小乗者との二者が居るが、そのうち前者である大乘の種姓(家系)を有する者になるという趣旨。小乗の家系があることは、例えば「声聞無数の願」に出る。チベット仏教では、発心については、〈現観莊嚴論〉 cp. 1 (Cf. I -19~20) で学ぶことが基本である。同論の冒頭では、〈無量寿経〉が説く阿弥陀仏を出して、誓願の完成、有情の成熟、国土の浄化という、浄土教の骨子を出す。シャーンティデーヴァの二種菩提心(誓願、発趣)に基づいて、菩薩戒を受けることについても議論される(Cf. 高崎〔1989〕、ツルティム、藤仲〔2014〕 pp. 276-277)。
- 32) 成仏までの無限に長い時間を想定している。
- 33) 欲求が有れば生じるし、なければ静まっている、そうした極楽のありようの説明である。
- 34) 「Tib.da nas yang (今からも)」とあるが、〈無量寿経〉と『最上国開門』によって「Tib.de nas yang」に訂正する。
- 35) 『最上国開門』の「Tib.kha zheng (Ga. 90b4)」によって、「Tib.kha」を補って理解した。
- 36) 業を作って苦しんでいる単なる畜生道の鳥ではない。鳥であっても極楽に往生して、その「趣」のままでありながら、その莊嚴の一つとなって居ることは、彼らは阿弥陀仏の変化であると同時にこのような形で肯定されていることを示している。
- 37) 『最上国開門』にこの四句は無い。
- 38) Tib.dpag tshad lnga bcu'i tshad tsam 藏訳〈無量寿経〉は「Tib.dpag tshad gcig dang / gnyis dang / gsum dang / bzhi dang / lnga'i tshad tsam yang yod // dpag tshad bcu'i bar gyi tshad tsam dag kyang yod do //」である。「五十由句」とはならず、「五由句と十由句」となる。
- 39) Tib.'od zer bye ba brgya stong phrag drug cu drug cu 'byung zhing 藏訳〈無量寿経〉は「Tib.'od zer bye ba stong phrag sum cu rtsa drug drug 'byung ngo」である。
- 40) ここの訳は難解である。Tib.lha'i ras bcos bu sna tshogs bting ba la sngas khra bo bzhag pa~
藏訳〈無量寿経〉は「Tib.lha'i ras bcos bu sna tshogs bting ba / sngas khra bo bzhag pa~」(河口、宗川訳: 諸種の巧作せられた天衣を敷き、前には美はしく置かるゝものを有する所の殿堂は~)である。『最上国開門』(Ga. 91a7)は〈無量寿経〉と共通する(小野田訳: 種々の粧様をなした天界の布でおおわれており、美しい座布団をしいた宝の座をそなえた多くの楼閣がある。ツルティム、小谷訳: 手仕事で作られたさまざまな天の布を敷き模様をついた枕が置かれている法座を備えた多くの楼閣がある)である。〈無量寿経〉梵本は「Skt. nānādivyadūṣyaśaṃstīṛṇaṃ vicitropadhānavinyastaratnaparyaṅkaṃ」(藤田訳: 種々の天の布で覆われ、美しい座蒲団を敷いた宝石の長椅子のある~)である(Cf. 藤田〔1975〕 p. 102)。
- 41) 「Tib.dar ni」を「Tib.der ni」へ訂正した。
- 42) 例えば「眷属長寿の願」(藏訳14願)には、「その仏国土において誓願の力以外、衆生たちの寿命の量に限りがあることになったなら (Tib.sangs rgyas kyi zhing de na smon

lam gyi dbang ma gtogs par sems can rnams kyi tshe'i tshad la tshad mchis par gyur pa)」とある。極楽では寿命は修短自在である。

43) (5a3.) 'gro ba ni lha mi gnyis su nges shing de yang lha mi'i tha snyad tsam ma gtogs mtshungs so //

- ・『最上国開門』(Ga. 91b7ff.) 「Tib.'gro ba ni lha dang mi gnyis su nges la de yang lha ma'i tha snyad tsam du gtogs pa mtshung ste」
- ・蔵訳〈無量寿経〉(Cf. 『浄全』 23, pp. 282-283) 「Tib.'jig rten gyi khams de na lha dang mi rnams tha dad pa med de // gzhan du na kun rdzob kyi tha snyad kyis lha dang mi shes bya ba'i grangs su 'gro ba ni ma gtags so //」

(試訳：その世界には神と人々は相違は無く、その他には世俗の言説によって「神」と「人」という名称としての趣は含まれない。)

中観の二諦説では、言説としては有、勝義としては無となるが、ここでは幾らか実有的に捉えられていて、言説としては天・人、勝義としては菩薩やその変化ということか。

44) (5b3.) Tib.chu klung chen po de rnams las lha'i glu dbyangs yan lag bye ba brgya stong dang ldan pa'i sil snyan mkhan mkhas pa rnams kyis byas pa las kyang lhag pa'i sgra snyan cing yid du 'ong ba rnams 'byung zhing /

- ・『最上国開門』(Ga. 92a8ff.) 「chu glung chen po rnams las lha'i glu dbyangs yan lag bye ba brgya stong dang ldan pa'i sil snyan mkhan mkhas pa rnams kyis byas pa byas kyang lhag pa'i sgra snyan cing yid du 'ong ba~」
- ・蔵訳〈無量寿経〉(Cf. 『浄全』 23, p. 276) 「Tib.chu klung chen po de dag las lha'i glu dbyangs yan lag bye ba brgya stong dang ldan pa'i sil snyan dag mkhas pa rnams kyis byas pa bas lhag pa'i sgra yid du 'ong ba 'byung ste」

45) 〈無量寿経〉(Cf. 『浄全』 23, p. 296) では、極楽世界の住人である声聞は一尋(梵本：一ヴィヤーマ)、菩薩は百由旬(梵本：十万・千万ヨージャナ)の光明を持つとされる。周りを照らす光の力である。

46) 海の広深性、山の不動性、光の明照性に譬えている。

47) 地の保持性、堅固性に譬えている。蔵訳〈無量寿経〉(Cf. 『浄全』 23, p. 303) には、「一切有情による善と不善とを忍ぶので地と等しい(Tib. sems can thams cad kyis dge ba dang / mi dge ba bzod pas sa dang mtshung pa /)」とある。

48) 通常の用法からは「薪(Tib. shing)」とありそうであるが、經典において、輪廻は恐ろしい場所である密林に譬えられる。それを前提として、「樹木(Tib. ljon shing)」と呼ぶのであろう。

49) 虚空のような三昧を説明している。〈無量寿経〉の内容(Cf. 『浄全』 23, p. 302. Tib. chos thams cad nges par 'phigs pa dang thams cad du ci yang med pa'i phyir nam mkha' dang mtshungs pa dang) に中観の説明を加えている。極楽の境界は人無我、法無我の証悟の対象であることを譬えている。

50) 「Tib.brgya brgya」とあるが、〈無量寿経〉によって「Tib.brgyad brgya」に訂正し

た。

51) Cf. Jäschke, *A Tibetan English Dictionary*, p. 257b

【do shal】 n.of an ornament hanging down from the shoulders; *Schr. mu-tig-gi do-shal* pearl-necklace; *Mil. id.*

52) このまとめの偈頌は『最上国開門』に対応は無い。

53) 「Tib. bzhes」を「Tib. gzhes」と理解した。

54) 小野田〔1981〕p. 156註36によって「Tib. kyi」を「Tib. kyis」と理解する。

55) 「Tib. brjed pa (忘)」では意味をなさないので、「Tib. brjid pa」と読む。

56) Cf. D. No. 258a2-3, 『浄全』23 (p. 286, l.9-12)

57) 「Tib. gi」とあるが、〈無量寿経〉によって「Tib. gis」に訂正する。

58) Cf. D. No. 258a4, 『浄全』23 (p. 286, l.14-15)

59) Cf. 高橋〔2005〕、佛教学大学総合研究所編〔2011〕pp. 29a-30b、野口〔2013〕

60) 「白傘蓋仏母 (Skt. sitātapatrāprajitā, Tib. gdugs dkar mo)」とはあらゆる危害から保護を約束する白傘を手にした女尊。この尊格を主題にしたものに、元沙囉巴訳『仏頂大白傘蓋陀羅尼経』(『大正蔵』19, No. 976)、元真智等訳『大白傘蓋総持陀羅尼経』(『大正蔵』19, No. 977) 等がある。様々な関係する儀軌が存在する。本文に出る「守護輪」とは結界に関係するものである (Cf. 高田〔1978〕p. 80, 281等)。その個所は前述二訳には確認できなかった。ツォンカパには、『頂髻白傘蓋礼讚文 (gTsug tor gdugs dkar can la bstod pa)』(P. No. 6050)、『頂髻白傘蓋略讚文 (gTsug tor gdugs dkar can la bstod pa bsdus pa)』(P. No. 6051) という短編の著作がある。またカルマ・チャクメー (1612-1678) には、『頂髻白傘蓋仏母の修誦 一極楽世界に行く教誡・鳥王である金翅鳥の牝鳥一』という著作もある (Cf. 佛教学大学総合研究所編〔2011〕p. 131)。Cf. ツルティム、山田〔1999〕。

61) 「頂髻 (頂上肉髻)」の功德を讃える「仏頂尊勝陀羅尼 (Skt. uṣṇīṣa-vijaya-dhāraṇī)」については、佐々木〔2009〕〔2013〕、佛教学大学総合研究所編〔2011〕p. 7bを参照。この陀羅尼の功德として、命終時に蛇が脱皮するごとく極楽世界に往生することが繰り返し説かれる。ツォンカパには、『薄伽梵母頂髻最勝尊礼讚文 “無死成就” (bCom ldan 'das gtsug tor rnam par rgyal ma la bstod pa)』(P.No. 6048)、『頂髻最勝尊並びに眷属に対する礼讚文 (gTsug tor rnam par rgyal ma 'khor dang bcas pa rnams kyi bstod pa)』(P. No. 6049) がある。

62) Cf. 『最上国開門』(Ga. 97a8ff.)

「nam zhig tshe yi 'du byed gtong ba na // 'khor tshogs rgya mtshos bskor ba'i 'od dpag med // mig gi lam du gsal bar mthong gyur te // dad sogs snying rjes bdag rgyud gang bar shog // (1)

bar do'i snang ba shar ba gyur ma thag // rgyal sras brgyad kyis ma nor lam bstan te // bde ba can du skyes nas sprul ba yis // ma dag zhing gi 'gro ba 'dren gyur cig // (2)」

63) 藏訳〈行願讚〉 Cf. D. No. 44, Phal chen, A. 361b7ff.、中御門〔2013〕

「bdag ni 'chi ba'i dus byed gyur pa na // sgrib pa thams cad dag ni phyir bsal te //
mngon sum snang ba mtha' yas de mthong nas // bde ba can gyi zhing der rab tu
'gro // (57)

der song nas ni smon lam 'di dag kyang // thams cad ma lus mngon du gyur par
shog // de dag ma lus bdag gis yongs su bskang // 'jig rten ji srid sems can phan par
bgyi // (58)

rgyal ba'i dkyil 'khor bzung zhing dga' ba der // pa dma dam pa shin tu mdzes las
skyes // snang ba mtha' yas rgyal bas mngon sum du // lung bstan pa yang bdag gis
der thob shog // (59)

der ni bdag gis lung bstan rab thob nas // sprul ba mang po bye ba phrag brgya yis //
blo'i stobs kyis phyogs bcu rnams su yang // sems can rnams la phan pa mang po
bgyi // (60)」